

子規のみちのくへの旅（二）

—『はて知らずの記』をめぐって—

黒澤 勉

目次

- 五、上野停車場から宇都宮・那須町―みちのくに涼みに行くや…
- 六、白河―汽車見る見る…
- 七、郡山・福原・本宮―その人のあしあとふめば…
- 八、黒塚―木下闇ああら涼しや…
- 九、満福寺―僧と二人の涼みかな
- 十、信夫山―涼しさの昔を語れ…
- 十一、飯坂温泉―平蔵にあめりか語る…
- 十二、葛の松原―人くずの身は死にもせで…
- 十三、仙台―月に寝ば魂松島に…

五、上野停車場から宇都宮、那須野―みちのくへ涼みに行くや：

『奥の細道』によれば、芭蕉は江戸深川にあった芭蕉庵を人に譲り、一旦、弟子の杉山杉風さんおふう（日本橋小田原町の魚問屋鯉屋の当主で、蕉門最古参の一人。芭蕉の経済的後援者でもあったという）の別宅さいと（採茶庵と呼ばれていた）に移って、そこからみちのくへの旅に出ている。元禄二年（一六八九年）三月二十七日（陽暦では五月十六日）の朝のことであった。月はまだ空に白く残り、上野や谷中の桜の花の梢も見えている。（『奥の細道』にはそのように記されているが、実際には、上野の桜は四月初めに満開、五月はすっかり葉桜となるから、实景ではなく、文学的な虚構であろう。このような虚構化は『奥の細道』のあちこちに散見する。これに対して『はて知らずの記』は、時に戯作的なユーモアを含みつつも、実体験がそのまま書かれている）親しい人々は前の晩から集まり送別の宴も開かれた。隅田川を下って、千住というところで船から上がり、いよいよこれから、「前途三千里の思ひ」―はるか遠いみちのくへの旅に出かけるのだと思うと、心細さや離別の悲しみで胸が一杯になる。

行春や鳥鳴き魚の目は泪（『奥の細道』）

時に芭蕉四十六歳、曾良との同行の旅とはいえ、徒歩である。「前途三千里の思ひ」は単なる修辭ではなく、実感であつたろう。季節も丁度、春も終わろうとしている頃で、心なしか小鳥も悲しげに鳴き、魚の目には涙が浮かんでいるようにさえ感じられる。

芭蕉を旅に駆りたてたものは「片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」と記すように、強い「漂泊」の感情であり、「白河の関」を訪ねたい、「松嶋の月」を見たい、という歌枕の地への憧れであり、西行や能因といった旅

の詩人達の足跡を訪ねたいという願いであった。

それから約二百年後の、明治二十六年（一八九三年）、芭蕉を慕ってみちのくの旅に出ようとする二十六歳の青年、子規の心はどうであったか。

芭蕉と違って、たった一人の旅とはいえ、鉄道や人力車が急速に普及していった時代である。日本に鉄道が敷設されたのは明治五年（一八七二年）、新橋―横浜の間であったが、以後、次々に全国に鉄道網が広がっていく。東海道線が全通したのは明治二十二年、明治二十四年には、上野・青森間の鉄道も開通していた。その汽車を利用すればよい。汽車の通っていない所は、人力車を利用すればよい（明治二年、和泉要助ら三人が共同で発明した人力車は、明治、大正時代の重要な交通機関となり、特に東京は「人力車の町」とも呼ばれた。子規も、東京での生活において、人力車に乗って桜を見に行ったり、虚子宅を訪問したりしているし、このみちのくの旅においてもしばしば利用している）。汽車と人力車、こうした文明の利器があるのだから、たとえ体力が乏しくても、たとえ遠距離であっても、旅は容易なことだ、そうした思いが旅立ちを気楽なものにする。結核の身であるとはいえ、老いを知らぬ若さが持ち前の楽天性を支えもした。

「いざ、出発」と借家のあった根岸を発つ。おそらく母八重も、妹の律も、子規のこの旅には反対であり、その身体を案じたであろうが、そうしたことは一切書かれていない。あくまで芭蕉を慕う一人の俳人として「日本」新聞に連載しているのだから、私生活に属するような記述は一切省かれているのである。子規庵は現在山手線、鶯谷駅で下車して徒歩で十分もかからないところにある。その子規庵から上野停車場まで、おそらく人力車で行ったのであろうか。

上野停車場に着くと、たまたま、五百木飄亭に会う。飄亭とはすでに別れの挨拶をしており「松島で日本一の涼

みせよ」の一句を送られていた。その飄亭は飄亭で、これまた、旅に出ようとして上野駅まで来ていたのである。駅は、人々が集まり、また別れる場でもある。その辺を、子規一流の諧謔を交えて次のように記す。

「松島の風に吹かれむひとへ物

一句を留別として上野停車場に到る。折ふし来合せたる飄亭一人に送らる。我れ彼が送らん事を期待せず彼亦我を送らんとて来たりしにも非ざるべし。まことや鉄道の線は地皮を縫ひ電信の網は空中に張るの今日、椎の葉草の枕は空しく旅路の枕詞に残りて和歌の嘘とはなりけり。されば行く者悲まず送る者嘆かず。旅人は羨まれて留まる者は自ら恨む。奥羽北越の遠きは昔の書にいひふるして今は近きたとへにや取らん。

みちのくへ涼みに行くや下駄はいて
など戯る」

『奥の細道』の別れの場面とは大違い、それぞれ旅に出ようとしてやつて来た者同士が、こうして互いに送りあうことになるのも便利な鉄道のためである。考えてみれば、鉄道網がこうして地を縫い、電信網（子規に「木下閤電信の柱あたらしき」という明治二十七年に作られた句がある。電信は明治二年に東京―横浜間に開通、十一年からは民間の利用も許され急速に広がっていく。子規はこうした新しいもの、文明開化の産物に深い興味をもっていた）が空にめぐらされている文明開化の時代にあつて、「椎の葉」とか「草枕」などという言葉も、旅路の枕詞として残るのみ。現実の旅とは異なる、文学的な虚を示す和歌の言葉となつてしまった。従つて、旅に出る者も旅路の苦勞を思つたり、もしやこれが永遠の別れになるかもしれぬなどと思つて悲しむことはさらさらないし、送る者も同様である。それどころか逆に旅人は羨ましがられ、留まる者は、旅に出られない我が身をくやしく思う。昔なればこそ奥羽北越といえは遠い地の例として、書にも記されてきた。しかし今、それは逆に近い地の例として挙げ

られる始末だ。そんなわけで、その辺に下駄をはいて出かけるような気分で、旅に出かけるのだ。そんな思いを「みちのくへ涼みに行くや下駄はいて」と戯れに詠んだ。

確かに江戸時代の人々と比べて、明治の開化の時代、東北への旅ははるかに容易なものになってはいたであろうが、二十一世紀の現代ならともかく、子規在世当時、東北本線も開通したばかりの、みちのくへの旅が、全く気楽なものだとも思われない。まして一月にわたって芭蕉の足跡を自ら歩いて辿ろうとするのであるから、苦労は予測されたはずである。しかしそんな心配をしないところに子規の能天気な楽天性、若さがある。句には下駄をはいて涼みに、というがまさか下駄で通すことはできなかったはずで、おそらく間もなく草鞋に変えたものと思われる。

子規にとって、東京以北の旅は初めてであり、汽車からの眺めも新鮮なものに感じられた。句も生まれた。

「汽車根岸を過ぐれば左右の窓に見せたる平田渺々として眼遙かに心行くさまなり。

武蔵野や青田の風の八百里

宙を踏む人や青田の水車」

列車に乗って上野停車場を発った子規は、左右の窓から開けて見える武蔵野の広々とした青田の光景を心満ち足りた思いで眺めながら展望を楽しむ。青田の中に見える水平は、くるくると廻り、誰か宙を踏む人がいるようにも見える。松山への帰郷の行き来で見慣れた東海道の旅、木曾路の旅とは異なる田園の風景である。

『奥の細道』を見ると、芭蕉は白河に着くまでに、室の八島や日光、那須野、黒羽、雲巖寺などに立ち寄っているが、子規は汽車で一気に宇都宮に来て、友人佃一予の家に泊まった。

「宇都の宮の知る人がりおとづれて一夜の宿を請ふ。驟雨瀧の如くそそぎて神鳴りおどろおどろしう今にも此家に落ちんかと許り思はれて恐ろしさいはん方なし。」

夕立や殺生石のあたりより」

『獺祭書屋日記』によると「七月十九日、汽車発上野、宿宇都宮、佃氏宅 松島の風にふかれん単物」とある。以後、この日記は記事を欠き、旅から帰って再び続いている。

佃一予は大学時代の友人でもあろうか、いずれ当初の予定で、ここで一泊と決めていたものと思われる。折しも真夏のこととて、驟雨が沛然として瀧のように降り、雷も恐ろしいばかりに鳴り響き、今にもこの家に落雷しそうな気配である。その恐怖は何ともいい尽くしがたい。

『奥の細道』には「殺生石は温泉の出る山陰にあり。石の毒氣はまだほろびず、蜂・蝶のたぐひ真砂の色の見えぬほどかさなり死す」と記されているが、子規はその殺生石の辺りの空から、稲妻が走っているのを眺めた。この雷雨を伴う夕方の激しさと生きものを殺すという殺生石の伝説が重なって、なお一層、その周辺はおどろおどろしく感じられる。

殺生石は栃木県那須町那須岳の寄生火山御殺山の東側にある熔岩に与えられた名前で、かつて硫気孔から有毒ガスが噴出してそこに近づくハチやチョウなどの昆虫が多く死んだという。科学的な分析などできなかった昔の人々にとって、その辺りは恐ろしい場所として伝説を生んだ。ある伝説には、鳥羽上皇の寵姫玉藻前に化けた金毛九尾の狐が安倍泰成に正体を見破られ、三浦介義明に射止められて石に化した。後に玄扇和尚がこれを石で打ち、石の霊を成仏させたという。これが謡曲「殺生石」の伝える物語である。子規はその物語を思い起こし『奥の細道』の記述に再び目を通ししたのであろう。しかし、汽車の旅としてそれを実際に見ることはできず、一句をもって、しのんだのである。

翌二十日、宇都宮を発ち、那須野の高原の中を汽車は走っていく。『奥の細道』によると、那須の黒羽で、農夫

の家に一夜の宿を借り、翌朝、野中に放牧されている馬を発見し、それを借りて旅した。その馬に二人の小娘がついて来たが、名前を「かさね」というので、曾良が「かさねとは八重撫子の名なるべし」と一句詠んだことが記されている。

折しも丁度、撫子の花の盛りのころであつた。子規は芭蕉、曾良の見ることのなかつた撫子を興味深く眺めた。

「二十日、汽車、宇都宮を発す。即景、

田から田へうれしさうなる水の音

名に聞えし那須野を過ぐるに、見渡す限り夏草生ひ茂りて、たまたま木ありとも長三尺には足らざるべし。唯ところどころに菖蒲、なでしこの、やさしう咲き出でたるは何を力にかと、いと心もとなさに

下野のなすのの原の草むらにおぼつかなしや撫し子の花

草しげみなすのの原の道たえてなでしこ咲けり人も通はず」

上野停車場から宇都宮そして那須野に向かう汽車の窓からの眺めで、子規の目を引いたのは、豊かな水田の風景であつた。田から田へと流れて行くその水も、旅に出た喜び、解放感に弾む心を映して、いかにもうれしそうな音を立てている。昨夜の恐怖などすっかり忘れて、汽車に揺られている子規に、水の音さえ聞こえてくるように感じられる。窓を開け放つと青田に吹く風が、肌にさわやかに吹き渡るように感じられる。この辺は現代の新幹線では味わえない旅の情緒であらう。

その名も知られた那須野を取り過ぎていくと、さき程までの水田の風景とうって変つて夏草が一面に生ひ茂っている。たまたま木があるとしても、三尺足らずの低木ばかり。ところどころに、菖蒲や、撫子がやさしく咲いているのは、一体この草むらの中でどうやって成長したのであらうと、可憐な花がいじらしく思われる。

「下野の…（下野の那須野の原の草むらに、いかにも頼りなげに咲いている撫子の花よ。）」

「草しげみ…（一面に草生い茂る那須高原には、その草のために道も絶えているのだが、そこに撫子の花が可憐に咲いている。人も通うことがないその道に。）」

二首の歌は、後年の子規の歌とは違った、優美なやさしいもので、可憐に咲く、撫子の花が、ただけしく生い茂る叢の中で、つつましく大人しやかな女性のように、ひっそりと静かに咲いていることを詠んでいる。

六、白河―汽車見る見る…

七月二十日、子規は宇都宮を発ち、車窓から那須野の風景を楽しんだ。やがて汽車は白河駅に着く。白河は福島県の南部、阿武隈川上流に位置する。五世紀頃、ここに蝦夷の南下を防ぐために関所が設けられた。白河の関である。白河の関は、勿来関・念珠ヶ関なごそのせきと並ぶ奥羽三関の一つで、堅固な要塞（砦）が築かれていたが、十三世紀ごろにはすでに関所としての役目を終え、実体は喪失していたという。江戸時代になって、白河城主、松平定信が武内社白河神社の地に、ここがかつての白河の関であるとして碑を建立して、その地を確定した。

以上のようなわけで、白河は陸奥国の入口として、都からの旅人は「これよりみちのく」という感懷を深くしたようである。『奥の細道』にも「心許もとなき日かず重かさるまゝに、白川の関にかかりて、旅心定まりぬ。『いかで都へ』と便求たよりめしも理也」と記されている。旅の初めにあたって芭蕉は「春立てる霞の空に白河の聞こえんと…」と記したように、「白河」に、「みちのく」に入りたいと願い、落ち着かぬ心のままに、日を重ねてきた。今ようやく白河の関にかかって、やっと旅心も落ち着いてきた、というのである。それは同時に、はるか「みちのく」に入った喜

びを江戸の門人、知人達に告げてやりたいという心にもつながる。「いかで都へ」という言葉は、平兼盛の「みちの国の白河の関越え侍りけるに 便りあらばいかで都へ告げやらむけふ白河の関は越えぬと」(『拾遺集』)を踏まえて裁ち入れた表現で、みちのくに入った感慨を、古歌に託し、古人の心情に重ねながら述べたものである。「白河」は古くから和歌に詠まれた名所、即ち「歌枕」として知られていた。

子規はこうした「みちのく」への関門として知られる白河入りをどう表現しているのであろうか。『はて知らずの記』は、汽車から見えた山脈の描写から始めている。

「常陸の山脈東南より来り岩代の峰勢西北に蟠る。那須野次第に狭うして両脈峰尾相接する処、之を白河の関とす。昔は一夫道に当りて万卒を防ぐ無上の要害、奥羽の咽喉なりしとかや。車勢稍緩く山を上るに、このあたりこそ白河の関なりけめと独り思ふものから、山々の青葉風涼しくして更に紅葉すべきけしきにもあらず」

―常陸の山脈が東南に走り、岩代の山々が西北に横たわっている。那須野の平原はしだいにこれらの山々に狭められて、両山脈の末端の接する所が白河である。昔は一人の武士がこの道を守って数万の兵士の侵入を防ぐような無類の砦であり、「奥羽の咽喉」であつたという。汽車はややスピードも衰えて山を登っていく気配である。さては、ここがあの白河の関であつたのだろうか、と一人思うのだが、山々の青葉風が涼しく吹き、古歌に詠われているような紅葉する気配とて全くない…

今、地図を手元に広げてみると、白河市の東南の方角に八溝山(一〇二二)や花瓶山、矢祭山(三八三)などのわりあい低い山脈が連なり、西方には茶白山(一九九五)朝日岳(一九〇三)が、その北に鎌房山(一三二九)二枝山(一五四四)などの高山が連なっている。そして前者は奥久慈県立自然公園、後者は日光国立公園、大川羽鳥

県立自然公園となっており、美しい山々の間に広がっているのが、白河市である。これらの山々は栃木県・茨城県と福島県、関東と東北を隔てる大きな壁であり、さればこそ古代国家がここに関所を設けたことも納得できる。ここで子規は芭蕉が一切触れなかったこと、即ちこの地が「無上の要塞」であり「奥羽の咽喉」にもあたる軍事上の急所であったことを指摘している。芭蕉もそのような歴史的事実は当然知っていたはずであるが、風雅の世界に遊ぶ『奥の細道』には、軍事、武にかかわるようなことは不要として書かなかったであろう。芭蕉はあくまで風流の世界に遊び、古歌の心を偲ほうとする。

芭蕉が白河の関を訪れたのも四月二十日（陽暦六月七日）で、一月ほど子規より早いとはいえ、やはり青葉の季節であった。『奥の細道』には次のようにある。

「中にも此関は三関の一にして、風騒の人心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を^{おもかけ}俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣装を改めし事など、清輔の筆にもとどめ置かれしとぞ 卯の花をかざしに関の晴着かな 曾良」

「紅葉を俤にして青葉の梢なほあはれなり」は、源頼政の「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散り敷く白河の関」(『千載集』)を踏まえて書かれたものである。芭蕉はここで「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関」という能因法師の歌に心を寄せ、たとえ眼前に秋風は吹かず、紅葉もみられないにしても、そういう古歌を、今この青葉の景に重ねてみるにつけてしみじみと心魅かれるという。

ところが『はて知らずの記』では「山々の青葉風涼しくして更に紅葉すべきけしきにもあらず」と言い放たれている。子規は青葉はどこまでも青葉として、涼しく吹きわたる風を感じるのみで、芭蕉のように紅葉を面影としてみることもなかった。これは芭蕉風の古人追慕の情と結びついた風流意識への一種の抵抗のようにも見受けられる。

が、『はて知らずの記』は、さらにパロディの気味を帯びて続く。

「能因はまだ窓の穴に首さし出す頃なるをきのふ都をたちてけふ此処を越ゆると思へば汽車は風流の罪人なり。

汽車見る見る山をのぼるや青嵐」

―能因法師は汽車に乗って物珍しげに窓の穴から首を出し外の風景を眺めているところであるが、それも思えば道理、昨日都を発って今日白河を越えるのである。汽車の速さは便利ではあるが、ゆとりから生まれる風流の心を失わせるわけで、汽車は詩心を生み育てる上で障害であり、たとえるなら罪人である。それにつけても、この青嵐の中を上がっていく汽車の力強さよ、速さよ…。

能因法師は「みちのくにまかり下りけるに白川の関にて詠みはべりける 都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関」(『後拾遺集』)と詠んでいるのだが、子規はその能因を汽車に乗せて、まだ都を出発したばかりで、物珍しげに車窓から首をさし出していると、からかっている。むろん、これは子規自身の姿であり、白河入りの感想を能因に託して述べたものである。芭蕉を慕って出たみちのくにへの旅の始まりにおいて、子規は汽車という文明の利器が「風流」を過去のものとするということに気づかざるをえなかった。しかし、子規はそれを嘆くのではなく、かえって近代人らしい合理的な精神をもつてその風流を幾分かかっている。「汽車見る見る」の句には、文明の進歩を肯定し、それを信頼する子規の心が伺われる。芭蕉のように姿勢が過去向きではないのである。

子規はこの白河で下車して、畦道を辿って結城氏の古城を訪れた。『奥の細道』には記されていないことであり、芭蕉はそこには行かなかったようである。

「白河の東半里許りに結城氏の城址ありと聞きて畦道辿り行く。水車場をめぐりて山に上る事数十歩高さ幾丈の巖石を巧みに鉛直にけづりて其面に感忠銘と題せる文を刻せり。ここは結城氏の古城の堀目手からめてにして今に堀目と称よなへ

たり。前に川を控へ後は山嶺相接せる險要にして、しかも風光に富めり。此の城出来し後、白河二所の関は廢せられたりといふ（二所の関といふは無類の要害なればとて、二重に関を構へたる故なり）。しばし碑前にやすらへば涼氣襟もとに滴るが如し。

涼しさやむかしの人の汗のあと」

―白河の東、半里ほどの所に結城氏の城址があると聞いたので畦道を辿って行つた。水車小屋のそばを過ぎ、山に上ること数十歩のところ、高さ数丈の巨大な石を巧みに垂直に削つて、その面に感忠銘（忠義に感ずるの碑銘）と題する一文を刻んでいる。ここは結城氏の古城の搦手^{からめて}で、今日も「搦目」と呼ばれている。前に川が流れ、後は険しい山なみが連なり、風景もよい。この城が出来た後、白河の関は廢止となつたという。二所の関という名は、天下無類の要害で、二重に関所を設けているところからつけられたものという。しばしその碑前に休んでいると汗が襟もとから冷たく流れる。涼しさや…（碑前に座し、襟もとから流れる汗を感じていると、その汗にかつてこの城を築いた人の苦勞が偲ばれてくることだ）

「涼しさや」の句は芭蕉の「夏草やつはものどもが夢のあと」を思わせる句である。芭蕉は平泉という古戦場において戦い、敗れて滅びていった武士達を偲び、そこに万物無常の感懷を折りこんだ。子規は城址を前にして、この城を築いた古人の苦勞を偲んでいる。子規の現実的な性格もそこにかがわれよう。

結城氏の城址を見た後、再び白河に戻り、その夜は中島山麓の家に泊る。

「白河に帰り中島某を訪ふ。この人風流にして関の紅葉を取りて扇などにすかしたり。当駅は二千戸ばかりの都市にして今は閭閻寂寥行人征馬の往来も稀なるに独り翠鬟^{すいかん}をたくはふるの楼閣^{ろうかく}魏々^{ぎぎ}として一廓を成すは昔の名残にやあらん。後庭華を歌ふの声だに多くは聞えず。

夕顔に昔の小唄あはれなり」

―白河に帰り中島某を訪ねた。中島は風流を解する人で、戯れて古歌に歌われているごとく、紅葉を取って扇の上に載せて示してくれた。白河の宿場町は二千戸ほどの町で、町の出入口にあたる門もひっそりとして、人馬の往来さえ稀である。ただ美しいまげをもつ女達の住む楼閣が高くそびえて一廓をなしているのは、昔の華やかな廓の名残りでもあろうか。奥庭に華やかな歌声がわずかにさびしく聞こえるばかりである。夕顔に：（夕顔の花の白く咲くこの夕べ、このあたりは、かつて廓としてにぎわったところとて、今はその名残りをとどめるように、あわれな小唄の節が聞こえてくるばかりである）

中島山麓は東京からやってきた俳人、子規を迎えるのに「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散り敷く白河の関」（『千載集』源頼政）を演じて歓迎の心を表わした。これは『奥の細道』の「卯の花をかざしに関の晴れ着かな」を意識した演出であり、子規もそのことを記すことによって『奥の細道』という古典に立ち向かう気配を示したともいえようか。

かつて廓として盛えたが、今は建物は残っているものの、わずかに女達の小唄が寂しく聞こえてくる、そこに子規は世の栄枯盛衰を感じとってしみじみとした一句をもって偲んだのである。

『奥の細道』の白河の項は、約二百字、『はて知らずの記』は約七百字、その内容において同じ白河とはいっても、見たものも違えば、そこから受け取る情趣も大きく違っているといつてよいだろう。

七、郡山・福原・本宮―その人のあしあとふめば…

(明治二十六年七月)二十一日朝、白河の町はずれを子規は歩いている。森を見かけたので、それを目当てとして登っていくと、はたしてそこは天満宮である。平地と森があり、小高い森の中には神社や寺院がひそり静かに息づいている。それは人々を休める憩いの場でもある。夏の暑い盛り、一人汗して旅し続ける子規は、しばしばこうした神社仏閣で身を休めた。名もないささやかな神社である。杉の木立ちももの古りて、いかにも閑静な地である。夏木立宮ありさうなところかな(夏木立の涼しくそびえているその辺りは多分、宮があるところに違いないと歩みを早めて歩いていくことだ)

そこではし休んだ子規は再び歩き続ける。日はどんどん昇って、暑さも耐えがたいばかりである。子規には物珍しいみちのくの田園風景が目映る。さっと句帳に三句を記す。

麦刈るや裸の上にこもひとつ(麦刈りをしている男がいる。裸の上に、こも一つを身にまとって。いかにもみちのくの夏である)

裸になって働く農夫の健康な姿は、病弱な詩人、読書家である子規にとって妬ましくさえ感じられた。目を転ずると桑の木にピンクの昼顔がまきついて花を咲かせているのも、やさしく感じられる。

山里の桑に昼顔あはれなり(山里の桑畑に沿う道を歩いていると、昼顔がその木にまつわり、からんで桃色の花を咲かせている。)

さらに目を移すと、広々とした田畑にやせ馬が尻尾を振って並んでいる。

やせ馬の尻ならべたるあつさかな（百姓が仕事をしているその近くに、やせ馬が二頭つながれている。暑い日の盛りの村の風景である）

須賀川につくと、かねての予定通り道山・壮山を訪ねる。文芸を愛するこの地の名士である。ここ須賀川はかつて白河領に属し、江戸時代には可伸、等窮、雨考、たよめなどの俳人が活躍している。そのうち等窮は『奥の細道』で芭蕉を歓迎してくれた俳人であり、芭蕉は「風流の初やおくの田植うた」という句を送っている。そんなことも話題としつつ、壮山との話は弾む。壮山のもとを辞し、郡山に宿を求める。郡山はかつては皇室の直轄領で二千戸余りの市である。三つ、四つの露店には氷売りの幟も立ち、老いも幼きも、男も女も、次々にやって来ては、氷を食べていく。そのにぎわいぶりにはあたかも機織りが機織の緯糸を通す梭（織機の付属具の一つ。製織の際、緯糸を通す操作に用いるもの）をめまぐるしく動かしているようである。

二十日の朝、浅香沼を見ようと宿を出る。浅香沼は安積沼とも朝香沼とも書くが、安積山の名もとにあり、歌枕の地、ショウブの名所としても知られている。「安積山かげさへ見ゆる山の井の浅き心をわがおもはなくて」とか「みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人にこひやわたらむ」という和歌で名高い。いずれも恋の歌だが、青年であるにもかかわらず、思う人もいない子規はこうした恋歌にはさほど興味を示しもしない。ひたすら風光に見入るばかりである。子規がこの時恋しているのは、みちのくの自然であり、芭蕉であり、俳句であった。安達太郎山を仰ぐ。はるか遠くにそびえ、白雲の間にぼんやりとその姿が見える。土地の人はこの山を親しみをこめて「あだたら」と呼んでいる。

短夜の雲をさまらずあだたらね（夏の短夜の名残りのように雲がたなびいて、あだたらの嶺がぼんやり、巨きくそびえていることだ）

郡山から北に歩くこと一里余り、福原という村はずれに長さ四五町幅二町もありそんな大きな池がある。これが古歌にも歌われた浅香沼だと伝えられている。小舟が二三隻、遠く又、近くに浮かび、棹を握る漁師が、この一幅の山水画のような光景の中に往き来する様は、その幽趣、筆に書き尽くしがたいものがある。

郡山から汽車に乗って本宮に向かう。本宮は数年前の洪水で、ひどく損害をこうむり、今なお、昔の姿に戻らないという。洪水の水の跡は、門戸や葎（しとみ）などにも残っており一間ほど上のところがあり、その厳しさがしのばれる。ここから徒歩で田舎道を辿っていく。山に沿った田の道はいかにも閑静である。

水無月やここあたりは鶯が（今、陰暦でいうと水無月であり、夏の盛りどころか秋も近い季節なのだが、この静かな田野にはまだ鶯の鳴き声も聞こえることだ。）

いずれにせよ、二百余年の昔、芭蕉がさまよった、その跡を慕い、訪ね歩くとどこもかしこも名所と感じられてくる。芭蕉の足はこの地を踏んだのであろうか、その目はこの風景を眺めたであらうか、と思うにつけ、ただその当時のことがしのばれて、旅行く芭蕉の姿が眼前に彷彿と浮かんでくる。

その人の足あとふめば風薫る（芭蕉を慕って旅する私に、初夏の風が薫るように吹き渡っていくことだ―）

南杉田の遠藤菓翁氏を訪ねると心よく坐に案内し、手厚くもてなしてくれる。氏は剛毅な気象ながら粗野に墮さず、純朴にして鋭い識見の持ち主である。わずか十戸の村にこのような人物に出会えたこともうれしく、感激のきわみである。しばらく語り合っていると、にわか雨が激しく降り出した。氏は言う。このような僻地ゆえ、何のもてなしもできません。ようやく飢えをしのげる一椀の飯に、半椀のおつゆがあるばかりです。けれども、蕉翁の旅がそうであったように蠅や蚤に苦しめられて一夜を明かすのも又、風流というものの、どうぞ今宵はお泊まりを、と

いうので勧められるままに一泊する。

翌二十三日朝、昨夜しきりに時鳥が鳴いておりましたねと言って

「奥の細道の跡を遊覧なさっている子規君を宿にもてなして」という詞書のもとに

草深き庵やよすがらほととぎす（草深い私の庵を尋ねて来られた子規を歓迎するかのよう、一晩中、ほととぎすが鳴いておりましたね）

という句を送られる。礼を述べてその家を辞した。

八、黒塚―木下闇あたら涼しや…

道を幾曲りもして長く連なっている二本松の町を過ぎ、野を歩くこと半里、阿武隈川を渡ると道の側に古い杉の木が立つ。木末も枝の先も大方枯れ残って鬼女の爪のように見える。その木の下に、碑を建て黒塚と呼んでいる。近くには兼盛の歌も刻まれてある。そのほとりにある寺は鬼のすみ家と聞き、行ってみると杉の木立ちがうつそうと茂り、巨石が積み重なってただならぬ気配である。僧侶を訪れて賽銭を投じた。その僧に伴って石のほとりの小さな堂に到り、その扉を開いて誘われて入る。老僧は壁の絵を指し、函に収められた古物を見せ、自ら客姿を改め、袈裟を正して咳をしておもむろに、この寺の由緒を語り始める

木下闇あたら涼しや恐ろしや（この杉の老木の下にたたずめば、何という涼しさよ、そして又恐ろしさよ）

阿武隈川の橋のたもとに茶屋がある。そこで休憩をとっていると、主人の翁は七十にもなろうか、茶などを汲んで気持ちよく、もてなしてくれる。家はやっと畳四、五枚を敷ける程度の小さな家で中に爐を仕切っている。屋根は半ば壊れて雨はもとより月の光ももれて来そうで、四隅の柱さえ腕よりも細いので、そよ吹く風にも揺れる気配

である。世間話などしているついでに、その主人はいう。さる年の洪水のため家を流され、其の後の火災もあつて家を焼かれ、今はただこうしたあばら屋に、はかない浮き世を頼みとして生き残っている老いの身は、阿武隈川のように浮かぶ瀬もなく、安達が原のその「あだ」の名のごとく、空しく過ごしているばかりです、と語って、しきりに頼えむその様は、天を恨むことなく、また人をとがめることもなく、自ら楽しんで他に何を期待するふうもない。いよいよ尊い存在に思われるので、わが心のままに、詩歌俳諧のことを語ると、翁もその道に明るい人である。座るそばに一片の紙があり、歌のようなものが認められている。翁が書いたのであろうかと尋ねるが、ただただ笑うばかりで何も言わない。その紙片をとってみると

黒塚の鬼の岩屋も苔むしぬしるしの杉や幾代へぬらむ（黒塚の鬼の岩屋も年経て苔むしている。しるしの松も一体どれ程経ったのであろうか。）

と記されている。これこそ世を厭つて黒塚のほとりに住む隠君子であらうとなつかしく、慕わしく感ぜられることだ。

九、満福寺―僧と二人の涼みかな

子規は阿武隈川の橋のたもとにあつた茶屋で、世を厭つて暮らす一人の翁に会い、互いに風流に寄せる思いを語りあつた。次にめざすのは満福寺である。

二本松の町並を横切ると広々と開けた野に出る。畦道が、あちらこちらに分岐し、山のふもとに広がっている。どの道を通つたらめざす満福寺に辿りつくのか、尋ねようにも一軒の家もない。

坂を一つ越えたところで、出会った人に尋ねると、「満福寺に向かっているのですか、それでは道に迷われたようですね。寺はこの山の裏にあると聞いています。山の頂に見える高い松の下に、木こりの通う道がありますから、そこを通ってお行きなさい」と言う。教えられるままに、細い山道をよじ登るようにして進んでいく。

蛇が杖の先をすばしこく走り抜け、名も知らぬ虫は驚いてわが目の前を飛び渡る。山はさして深いわけではないのだが、人も通わないので、松の木に吹く風も身にしみて感ぜられ、赤いきのこ、白い草花、みな、この世を離れた仙人の住まいのような趣がある。

下闇にただ山百合の白さかな（うつそうと茂る山道の、その木下闇に山百合の花が、白く、ぼうっと浮かびあがるように見えることだ）

眼下の木の間に見える家の棟こそ、満福寺であろう、と急いで下っていく。ところがその見えたはずの家はどこにやら、木々の間に隠れてしまって、方角もわからない。森に沿って行くこと、一、二町、左に曲ると突然一軒の建物が現われる。太神宮（伊勢大神宮）を祭る神社である。その宮の境内に立って見下す。すぐ近くに寺の建物があった、低く隣に連なっている。その寺をおとずれて、僧侶と世間話や詩歌の話などうちまぜて語り合い、しばしくつろぐ。

山寺の庫裏ものうしや縄叩（人の訪れることのない山寺の庫裏で、僧もいかにも退屈げに縄を叩いて、無聊をまぎらわしている。）

この寺は天台宗の最澄の開基になるもので、飯出山満福寺という。石段は数百段の高さがあり、山を削り、木立を伐り開いたところに、数十畝の平地がある。村里も遠く、山静かで、まだ老いて残る鶯の声が、蟬や蛸の木末に鳴く声と競いあっているように聞こえてくる。少し鳴き始めたこおろぎの声は昼もなお夏草の底に聞こえる。昔は

七堂伽藍の美を尽くし、善を尽して、莊嚴な道場であつた。しかし、数年前に火災があつて六百年昔の建築も一片の灰燼となり「諸行無常色即是空」の道理を眼の前に示しているのは、いよいよはかなく思われる。新しい建物は、仮普請のままで寺の建物といいながら一般の住家と何ら変わらない。それも思えば仏も永遠の長い時間の間には因果の法則を逃ることはできないことの証ともいえようか。神社は維新前の、神仏混交の名残だと聞く。

すずしさと神と仏の隣同士（木立の涼しく立ち並ぶ飯出山満福寺は、聞けば維新以前、神社と寺院が隣り合つていたという。神と仏が争うこともなくそうして仲よく並んでいるのも、いかにも涼しく感じられる。）

山号の「飯出山」というのも珍しい名前である。「どういう意味ですか」と尋ねると僧侶が答えて言う。

「その昔、源義経公が奥州へ落ちのびてきた際、ここに立ち寄った折、寺では公のため飯をさし上げました。その時、弁慶が『この寺の山号は』と尋ねました。そこで『まだ山号はございません』と住職が答えたところ、『それなら飯出山というのが良からう』と、弁慶自らが名づけてくれた、という話が寺に語り伝えられています。」と。

その故事も興味深く、今取っているこの食事のことも思ひあわされて一句詠む。

水飯や弁慶殿の喰ひ残し（僧侶と語りながら満福寺で水漬けの飯を頂いている。聞けばこの寺はかつて弁慶が訪れた時、飯出山と名づけられたという、それなら、この夕食の飯もその弁慶殿が食べ残したものと思つていただくこととしよう）

月明かりの中で行水をすませ、庭に板を並べ、団扇を蚊を追う道具として残し、柳の葉を吹く涼しい風に吹かれて休む。杉の木立ちも高く、黒く、月は低く青く照っている。

ひろしきに僧と二人の涼みかな（庭に板を敷き並べ、僧と二人で存分に涼しさを味わうことだ）

御仏に尻向け居れば月すずし（御仏に尻を向けて外で休んでいると、月もいかにも涼しく照らしている）

僧侶に引き止められるままに、ここ満福寺に一泊する。仏壇の隣の書院の真中に寝ころぶわが身は、この世から離れた仙界に遊んでいるような心地である。

寺に寝る身の尊さよすずしさよ（こうして寺に泊まっていると、わが身も何か御仏達と並ぶ尊い存在のようにも感じられ、また涼しくも感じられることだ。）

十、信夫山―涼しさの昔を語れ：

七月二十四日、子規は満福寺に別れを告げて二本松から再び汽車に乗り、福島で下車、夕刻のこととて宿をとり、外に出た。福島の外に小さな山がある。これがあの歌枕で名高い信夫山という名所で、その側に公園があると聞く。それではその公園まで行こうと、そぞろ歩きに興ずる。十二日の月も澄み渡り、青田を渡る風も涼しく、心地よいので、町に帰る気にもなれない。畦道づたいに道に迷いながら行くのもいかにも風流である。

笛の音の涼しう更くる野道かな（笛の音を涼しく聞きながら、野道をゆくうちに、しだい、しだいに夜も更けていくことだ）

ついに目当てとした公園に辿り着いた。公園は山の麓からやや上った所にあつて、刑務所と並び立っている。それはあたかも地獄極楽の一对の掛物の絵を並べ掛けているような感じである。山を上ることしばし、平坦な場所に出る。月は大空にかかり、四方の山々は、薄い絹のベールにおおわれているようにも見え、福島ふくしまの町は足元の下の方におぼろに見える。

二十五日、葱摺しのぶずりの石を見ようと思って宿を発つ。打ちならしたような平坦な道は何の苦もないものの、夏至の

極暑い日差しは、日傘を透かしてもなお焼けるような暑さである。しかも道の傍らに涼を取るべき木立ちとてない。町から一里半ほどの大きな道の行きついたところに、山の麓に木立ちが並び、薨がちらりと見える。これが葱摺の観音である。正面に桜の木が高くそびえ、その木の根元に芭蕉の句を刻んだ碑がある。

子規はその芭蕉の句を記していないが、『奥の細道』によると次の句がある。

早苗とる手もとや昔しのお摺（芭蕉。今、葱摺の歌枕の地に立つ、わが目の前で、早乙女が早苗をつかみ、水中で根元の泥を洗い落として束ねている。その手つきは昔、しのお摺の染めた時の手つきを懐かしく思い出させてくれることだ）

句碑の後には、柵をもつて囲んだ高さ一間、広さ三坪ほどの大きな石が露出して見える。これが葱摺の名残りと伝えられているものである。左にある石の階段を登って行くと、観音堂の前に出る。壮大とはいえないが、彫り刻まれた極彩色のあでやかな色づかいに昔のことが忍ばれる。

涼しさの昔をかたれ葱摺（芭蕉はここに来て、しのお摺の昔をしのぶ一句を残した。そのように芭蕉が味わった涼しさを、その心を私にも語ってほしい。葱摺の、その石よ）

芭蕉が『奥の細道』の旅に出かけようとしたのは、みちのくの歌枕の地を訪れた古人の心をしのびたいと思ったからだといわれている。葱摺も「陸奥の忍ぶもぢずり誰ゆゑに乱れんと思ふ我ならなくに（『古今集』恋、源融）の歌で名高い歌枕の地であった。この歌は、陸奥の信夫で産するしのぶもぢずりの模様のように、あなた以外の誰にも心を乱そうとするような私ではありません（そのことをわかってください）という恋の歌である。信夫の地には、染料となる忍ぶ草を摺りつけて乱れたような文様とする「もぢずり」の伝統があった。芭蕉は今眼前に早乙女達の早苗を取る手つきに、今はすたれたもぢずりを染める時の手つきをしのび、はるか王朝の貴人の恋をしのんだもの

であらう。

源融^{とある}は嵯峨天皇の皇子であつたが臣籍に下り、中納言となつて東北の名勝地を訪ね歩いた。その折、このしのぶの里の娘虎姫と恋に陥り、また都に上つたという。お百度参りの悲願を観世音菩薩にかけ、毎日清水で身を浄めて祈願した。しかし融からは何の便りもない。満願の日、青葉の葉で（一説に麦の穂先で）石の表面を摺ると意中の人が現われた。この話を都で耳にした融は絹の織物に添えて「陸奥の忍ぶもぢずり…」の歌を送つたという。

子規の「涼しさの…」の句は、源融の和歌をしのんで作つたものでなく、芭蕉がこの葱摺を訪れたことをしのび、葱摺の石に、芭蕉がここを訪れた時の、その涼しさを、そのさわやかな俗世を離れた涼しい心を語ってくれと、詠んだものであらう。ちなみに芭蕉がここを訪れたのは旧暦五月一日、陽暦では六月十七日であり、「涼しさ」を意識するような季節にはまだ早かつた。

それに対して、子規が葱摺を訪れたのは七月二十五日。酷暑のさ中であつた。その酷暑の中にあつて芭蕉を思うことは子規を「涼しい」心地にさせた。「涼しさ」は単なる感覚としての涼しさでなく、江戸を離れ、世間を離れて旅に生きる詩人芭蕉のさわやかなこだわりのない生き方を含めたものだらう。それは今、子規自身が病から解放され（事實は「忘れていた」というに過ぎなかつたのだが）、勤務から解放されて（これまた事実としては、この旅も日本新聞社員としての仕事であつたのだが、好きな旅はそんな義務感も忘れさせてくれるらしい）自由なのびのびとした気持ちを味わっていることをも、示しているようだ。「涼しさの昔を語れ」と書く子規は、半ばその涼しさを味わつてもいるのである。

十一、飯坂温泉―平蔵にあめりか語る…

七月二十五日、子規は葱摺しのぶすりを見て福島町の町に戻った。帰路も、夏の盛りとて耐えがたい暑さであった。福島からその夜の宿にと予定していた飯坂まではさほど遠くない。しかし、徒歩では体力的に無理と思われたので、人力車で向かうことにした。先ほどまでの青空はやや曇り始め、野を吹く強い風に着物があおられる。涼しさきわまって、逆に寒いほどである。暑さ、寒さを感じ易いのもおそらくは病弱な体のためでもある。寒さに肌は粟立っている。宿に着き、湯に入ろうと外に出ると雨がはらはらと降り出す。浴場は二ヶ所あるが、その雑踏ぶりは、芋を洗うごとである。

夕立や人声こもる温泉の煙（今日の晴天、暑さがまるで嘘のように夕立が激しく降り出した。この温泉の湯煙の中に人声がこもり、その雨音と共に聞こえてくる）

明けて二十六日の朝、小雨がそぼふっている。宿を出て飯坂の町を下ること二、三町ほどのところに、数十丈の眼下を流れる川がある。摺上川するかみという。飯坂村と湯野村と分かち、村境の川である。この摺上川にかけた橋を十綱とつなの橋と名づけている。その名のごとく、昔はこの川を渡るのに綱を手繰り寄せて人を渡したのである。その様は、あたかも籠の渡しにも似ていたであろう。古歌にも

みちのくのつな橋にくる綱のたえずも人にいひわたるかな（みちのくの十綱の橋を渡るために手繰り寄せる、その長い綱のように、止むことなくあなたに恋し続けることです）

などと詠まれていたのだが、今は鉄の釣り橋がかかって、行き来する手段となっている。明治大帝の御代の、文明

開化の時代にあつて、旅が楽にできるのは旅人にとって有難い、うれしいことではある。しかし、いにしえを恋慕う尚古の詩人は、古歌に詠まれているような昔の風景を見たいなどと思つたりもするのである。

釣り橋に乱れて涼し雨のあし（摺上川の断崖のような岸边に立つて見やると、雨脚が乱れるように釣り橋に降りそそぎ、いかにも涼しげな一幅の絵のようである）

岸の向かい側の絶壁にそつて、三軒の階をなす建物が建ち並んでいる。その間から、一筋の流れが玉となつてほとばしり落ちる眺めも珍しく、心魅かれる。

涼しさや瀧ほとばしる家のあひ（家々の間から流れ落ちる水が滝となつて眼下にほとばしる風景を見ると、いかにも涼しく感じられることだ）

宿に帰つて昼寝をする。その夢の中で子規は仙人になつて空を飛んだようである。絶壁の下を流れる滝と俗世を離れた旅がそんな夢を見させたのであろうか。

涼しさや羽生えさうな腋の下（夢の中にまで摺上川に落ちる滝の様子が見えていかにも涼しく、自分は仙人になつて脇の下から羽が生えて飛びそうな気配である）

昼寝から目覚めて、飯坂の温泉宿で、そこに使われている十六、七歳の一人の少年と語りあつた。その少年は子規に尋ねて言う。

「自分は越後生まれの者ですが、早くから故郷を離れ、諸国をさまよい、今はこの地に足を留めております。しかし、もとよりこの地に落ちつこうなどと考えているわけでもなく、なお今後も流れ続けて日本国中を見物しよう、などと決めております。けれども、それより、できることならアメリカに渡つてみたいと思つておりますが、どうしたらよいでしょうか」と。子規が東京から来た書生だというので、そんなことを尋ねたのであろう。「アメリカ」

という国名もまだ耳に新しい時代であった。

子規は、その少年が若い大きな志を立てていることに心打たれて、望むがままに様々の話を語ってきかせた。子規とて、歴史や英語の学習、また自ら夢中になった野球を通して興味を抱いていたアメリカである。田舎では聞けない話をあれこれと語ってきかせたことであろう。語り終えて、「お前の名は何というのか」と尋ねると、「平蔵」と答える。そこで戯れに一句詠む。

平蔵にあめりか語る涼みかな（この鄙^{ひな}の温泉宿で働く少年、平蔵にアメリカのことを語ってきかせる。それ
もいかにも氣宇大きく涼しい心地がすることだ）

明日は土用の丑の日だというので近隣の四方の村々から来る浴客は、夜になっても絶えず、まことにぎやかなことであつた。

ここ飯坂は源義経を守ったことで知られる忠臣、佐藤嗣信等の故郷である。その居城の跡は温泉から東の方、半里ほどの所にある。医王寺という寺には、義経、弁慶の太刀、笈^{おい}（行脚僧修験者などが仏具、衣服、食器などを入れて背に負う箱）が秘藏されているという。義経を守ろうとした忠義の心の厚さゆえでもあろうか、この地の商家には佐藤姓を名乗っている者が多い。

子規は結局飯塚まで来ていながら、宿から半里の所にある医王寺を訪れなかった。体調もすぐれなかったし、是非訪れなくてはという気持ちもなかったようである。しかし芭蕉はここで佐藤一族にまつわる悲劇を偲び涙している。源義経の物語を通してよく知られていることではあるが、あらためて紹介しておこう。

平泉の藤原秀衡のもとにいた義経は兄頼朝を助けるべく、奥州各地の兵を引き連れて鎌倉に参した。この時、秀衡の命を受けて従ったのが、信夫庄司、佐藤基治の子息、継信、忠信兄弟であつた。しかし継信は屋島の合戦で義

経を狙う矢に身代りとなって討死にし、忠信も京都堀川で苦境に陥った義経を救うべく、その装束を着て応戦、その身代りとなって壮絶な最期を遂げた。二人の息子を失って母、乙和は、深く悲しんだ。その母を慰めようと兄弟の奥方、若桜と楓は、自らの悲しみを抑えて、甲冑かっちゅうを身につけて、兄弟凱旋の様を演じた。

芭蕉は飯塚の鯖野にあった丸山という庄司の旧館を訪れ、この悲話を思い出しながら、以下のように『奥の細道』に記している。

「麓に大手の跡など、人の教ゆるにまかせて、泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも、二人の嫁かするし、先づ哀なり。女なれどもかひかひしき名の名に聞えつるものかなと、袂をぬらしぬ。堕涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞へば、ここに義経の太刀、弁慶が笈をとどめて什物じゅうもつとす。

笈も太刀も五月にかざれ昏幟かみのぼり

五月朔日ついたちの事なり」

義経に忠義を尽くして死んでいった二人の武将の運命を芭蕉は思い、その妻たちのけなげな振舞に深く感動を覚えた。「泪を落し」「袂をぬらしぬ」と、二度にわたって落涙の様を書き記している。ここには滅びゆくものに対する深いあわれみの情が伺われる。しかし、芭蕉と共に随行した曾良の日記によると、義経の太刀、弁慶の笈など、実際には見ていなかったという。

「昏幟」は端午の節句に立てる、武者絵や鐘馗などを紙に刷ったのぼりである。句は、今丁度、五月の節季の時として義経主従の笈も太刀も節句の飾り物としたらどうか、と追懐の情を詠んだものであろう。しかし、これも「五月朔日」とあるものの、実際には五月二日であったという。単に「事実の記録」としての紀行文でなく、「虚構」をないまぜにしつつ「作品」を育てていく芭蕉の作品創造の過程には興味深いものがある。

芭蕉を尊敬し、その跡を慕ってみちのくへの旅に出た子規であるから『奥の細道』を携えていったことは間違い

ない。そして折々、その所々で、『奥の細道』をひもときつつ、書き、それを「日本」新聞の原稿として旅先から送り続けた。子規が自らは行くことのなかった医王寺のことについて触れているのも『奥の細道』に触発されたからだと思われる。しかし、子規は芭蕉と違って、滅びゆくものに対する共感の念、仏教的な無常観は乏しかった。子規は芭蕉以上の病体ではあったが、「明治」の「青年」であり、その心には「あめりか」を語るさわやかさ、明るさがあった。旅によって俗世を離れたとはいいいながら、書いているのは「日本」新聞への記事であり、読者を意識したあらたな「奥の細道」である。

子規はこの旅を通してみちのくの人々の生活の一端に触れ、そこにも関心を抱いたようである。食に関心も深く、大食漢を自認していた子規は、次のような感想をもらしている。

この地に限らないのだが、奥州の賤民^{せんみん}達は、普通、胡瓜を生で嚙^かって食べる。それはあたかも、まくわ瓜を食べるようなものである。その他、一般に客をもてなすのに、茶を出す時に、茶菓子の代わりに糠漬^かけの香の物を出すなど、その質素な生活ぶり、都の人の知らない所である…

十二、葛の松原―人くずの身は死にもせで…

二十七日、空は曇って、朝の風がまだ冷やかである。子規は二日前から、体調悪く、気分すぐれないので、予定していた医王寺にも行くことができなかった。人力車で桑折に向かう。途中、葛の松原を通り過ぎた。

世の中の人にはくずの松原といはる身こそうれしかりけれ（世間の人に、葛の松原、と言われるわが身であるが、それもかえってうれしく感じられることだ）

と、古歌に詠まれた所である。疲れのため、ここで人力車を降り、掛茶屋で一時間ほど休む。

野面から吹きつける風は冷たく、病身にとって耐えがたいほどである。子規の顔色の悪いのに驚いた茶店の婆さんが心配して声をかけてくれる。しいて「病氣なんかではありません」と打ち消すと、その傍らにいた嫁がほえんで言う。

「都の人は色白なんです。私達はこの土地の百姓ばかり見慣れているものですから、お母さん、そんなに心配なさっているだと思います。失礼をお許し下さいね」

（ここでは共通語に直して書いたのだが）表記しきれないその言葉も無骨な田舎訛りで、かえって面白く感じられる。

人くずの身は死にもせで夏寒し（古歌で知られる葛の松原を通ってきた自分も、その人くずのような取るに足りぬ病いの身の上であるが何とか、死ぬこともなく生きながらえて、今こうして夏の寒さに震えていることだ）

桑折で人力車を降り再び汽車に乗った。伊達の大木戸はあつという間に過ぎて岩沼で下車する。気分はなおすぐれず、昼食を取ることもできないような状態である。武隈の松は、ここからすぐの所にある、と聞いても行く気にもなれない。ただ、実方中將の墓だけは詣でずに終わるのも悔しいから、地図を取り出して調べ、町はずれを左に曲がり、笠島へと向かう。

その途中、草履を履いた巡査が子規の後ろからやって来た。子規は何しろ下駄履きの旅である上に、体調不振で歩みも遅かったのである。「中將の墓はどちらに」と尋ねると親切にも「私について来なさい。案内してさしあげましょう」という。遅れがちな子規はいたわられながらついて行つた。その途中、珍しい話など聞くと病苦も忘れ、

一里余りの道も順調に進んで笠島の仮住居にしばしの間身を休めた。巡査は地図を開いてこれから先の道のりを教えてくれた。大層親切な人である。教えられた通り野道を四五町も行くと、岡の上に杉がおぐらくそびえる中に古い社がある。これがあの有名な笠島の道祖社である。京都六條の道祖神が女の商人と相通じて、ついにここで倒れたという故事がある。しかしそれは言い伝えであって、もとより確かなことはわからない。

われは唯旅すずしかれと祈るなり（ここ笠島の道祖社には、それにちなむ物語もあるが、病いに疲れている自分としては、唯この旅が涼しかれ、安らかなれと道祖神に祈るのみである）

杉の木立の中を走る道が横に曲がり、薬師堂を下って行く。実方の中将が落馬なさったというのは大方、この辺りであろう。中将は一條天皇の御代の歌人である。ある時、帝の御前で行成卿の冠を落としてその逆鱗に触れ、それとなく「奥羽の歌枕を見て来よ」、との勅を蒙って、各地の歌枕の名所を尋ね歩いてはるばるこのみちのくへやって来た。ここにさしかかった折、社の近くなので馬を下りられるよう土地の者が申し上げると、「この社は何の社でしょうか」とお尋ねになった。土地の者が、これこれしかじかと答えると、それはいかがわしい社である。馬を下りるまでもあるまい、とそのまま坂を上がろうとなさったが、一体どうしたことであろうか、落馬なさって奥州の、この果ての地であえなく生涯を終えられた、と伝えられている。

田圃の畦道を数町行くと塩手村があり、そこに中将の墓所がある。村童に案内されて行くと竹藪の中に柵をもって囲まれた一坪程の土地はあるものの、石碑のかけらさえない。ただ、一本の筍（たけのこ）が、誤って生えたように、丈高く、空を突きているように伸びているのも、かえって面白く感じられる。その傍らに西行の歌を刻んだ碑がある。「枯野の薄かたみにぞ見る」と詠んだのはここなのであった。ひたすら、あわれに心打たれたので我が旅の行末を祈って

旅衣ひとへに我を護りたまへ（今西行の歌碑を目の前になると、その旅姿がなつかしくまぶたに浮かぶ。西行法師よ、どうか私のこの旅を見守って下さい）

塚の入り口の向こうには、木柵をもって囲われた地があり、そこに芒が生えている。やっと一尺ほどに伸びたものではあるが、「かたみの芒」とは、これをいうのであろう。増田迄の一里の道に、心細いような思いを抱きながら、やっとたどり着いて、汽車は仙台に入った。尺八や月琴、胡弓などを合奏して、家々を回り歩いて錢を乞う者が多く見られる。郡山からこちらの地域では、しばしばこの門付けの人々を目にしたのであった。

十三、仙台―月に寝ば魂松島に…

二十八日、空よく晴れて、しだいに暑くなってきた。病の疲れゆえであらうか。旅路の疲れが重なったためであらうか。朝ともなく、昼ともなく、夜ともなく、ただただ睡魔に襲われてうとうとと眠る。旅にあつて孤独な子規は、枕一つをこの上ない友としていた。看病してくれる人もないのをよいことに、ただ眠りこけた。

眠りから覚めて灯の下で日記をしたため終わって、窓を開けると、十六夜の月が澄みわたって、日頃の憂さを晴らしてくれるような感じである。ふと、いまだ見ぬ松島の風景がまぶたに浮かび、心は飛び立たんばかりにはやる。どうしてこの美しい月をむだに見過ごしてよからう。この月の下に照らされた松島を眺めねばと、足はつい外へと踏み出してしまう。しかし、もはや夜も更けて終列車の時刻も過ぎたという。不平に耐えず、一人、口の中でぶつぶつとしきりに呟きながら蚊帳に入る。あいにくなことに月光は旅宿の部屋のガラス窓を通して、枕辺に落ちていく。心の昂ぶりのため子規は眠ろうにも眠ることができなかった。

月に寝ば魂松島に涼みせん（この美しい月光のもとで横になっていると、わが魂はすでに松島に遊び、涼んで
いることだ）

十七日の月を見過ぎたら、故意に松島の風光を裏切ろうというものである。「明日は必ずわが国第一の山水に
向かおう」と一人心に決めて眠りについた。